

令和3年度墨田区観光振興会議（第2回） 【要点録】

日 時	令和3年4月23日（金） 午前10時00分～午前11時30分		
場 所	墨田区役所 12階 122会議室		
出席者	常任委員	戸崎 肇（欠席）	桜美林大学航空・マネジメント学群教授
		森山 育子	一般社団法人墨田区観光協会理事長
		鹿島田 和宏	墨田区産業観光部長
	招請委員	阿部 貴明	東京商工会議所墨田支部会長
		高野 裕次	墨田区副区長
	事務局	楠 幸輔	墨田区観光課長
		瀬戸 正徳	墨田区産業振興課長
		塩澤 満	墨田区経営支援課長

は座長

配布資料

出席者一覧

検討資料 第2回観光振興会議

議事要旨

1 開会・出席者紹介

（事務局から説明）

会議の進行が事務局から鹿島田座長へ移る。

2 資料説明（案内所の現状等について）

検討資料「第2回観光振興会議」について、今までの案内所分科会での議論内容の報告、今後の観光案内（プロモーション）のあり方及び観光案内所のあり方等、事務局から説明。

3 意見交換（要旨）

（阿部委員）

○新型コロナの影響は、観光案内所のあり方を含め今後の観光施策を見直していく上で避けられないものであるが、新型コロナを機にこれまでのすべての観光の取組をリセットするのではなく、収束後を見据えて、残すべきものは当然しっかりと支援していく必要がある。

観光協会は、法人化の検討の際に、観光振興事業を積極的かつ継続的に推進していくため、自主事業を積極的に展開していくこととされ、自主事業の重要な柱として物販業が位置付けられていた。自主事業を通じて得た収益によってシティプロモーションを展開し、区の観光振興に寄与することを目的としていた。

こうした成り立ちを踏まえると、新型コロナの影響で、物販業による収益を得ることが困難となっている現状においては、一時的には物販についても見直さざるを得ないと思う。

○「モノ主体からコト主体へのシフト」という言葉は良い。しかし、モノは実物であり、その動きが直接的に経済につながるが、コトは実体がないため分かりにくい部分があり、観光協会が区民からますます見えなくなっていく懸念がある。今後、コトが重要であるということは分かるが、行政的な印象が強いと感じる。

○コトは、例えば「忠臣蔵」のように広域で成り立っているものが多い。墨田区だけで完結できないので、行政区域にとらわれないプロモーションを行っていかねばならない。

○行政は公であることから、全般的な紹介はできても、個別の具体的な店舗等の紹介はできないため、プロモーションが抽象的になってしまう。行政だけでできないものは、行政からしっかり切り離して、どのように取り組んでいくかを考えないといけない。観光協会を上手く利用するという役割分担の問題であろう。

○日常の観光資源化は、スカイツリーの誘致が決定し、墨田区で観光振興に力を注いでいこうという、黎明期にやろうとしていたことに改めて取り組むということ。問題は、そうした取組の財源をどうするのかということと、行政が直接的に関わることが難しい個店や神事等に関する取組をどう推進していくのかということである。

○区と観光協会は、観光振興を一緒にやる、ということが最も重要だと思う。今一度、行政と観光協会がイコールパートナーであるという初心に戻るべき。改めて意思疎通を円滑にして、互いを理解しながら連携して行く必要がある。

（高野委員）

○一般社団法人化する際に、行政と観光協会はお互いの役割分担に基づいて、イコールパートナーとして観光施策を進めていく、という位置付けで始まった。

○民間と行政との役割分担を明確にして、それを行政がしっかり理解することが必要である。行政は自らの圏域に縛られてしまうため、広がりやに欠く面がある。例えば、花見の時期に作成している隅田川の桜マップは、民間である観光協会が作ることで、墨田・台東のどちらのスポットも描くことができる。観光客の視点で考えたとき、より良い展開をするために必要な役割分担を整理していかねばならない。

○観光客は地域の方々の日常の暮らしに興味を持っているが、なかなか近づきづらいところがある。例えば、大衆的な居酒屋など、入ってみたいと思っても外国人観光客にはハードルが高い。そうした時、利用方法が書かれたものが入口に貼ってあるだけで、ハードルは下がる。地域の日常に入りやすい仕掛けづくりをしていくことが重要であり、観光協会の役割となるのではないかと思う。

（鹿島田座長）

○行政が直接的に関わることが難しいところは、観光協会と役割を上手く分担し、連携しながら進めていかねばならない。

○開業から年月が経過し、施設全体の来場者数やフロア的环境など、様々な状況の変化があったところに新型コロナの影響が重なり、当初想定していたスキームについては見直さざるを得ない。現状のソラマチ5階という場所での役目は終えたと思うので、今のまち処は廃止して、次の段階へと進みたい。

○物販にはモノのプロモーションという側面だけでなく、地域の産業支援という側面もある。そうした視点に立った時、物販における行政のパートナーは幅広く考えていく必要があり、観光協会はその中の一つだと思う。行政としては、産業振興施策全体の中で、物販というものを整理し、検討していきたい。

（森山委員）

○観光振興というのは、観光という産業を通じて、シビックプライドの醸成というものを含めてやっていくべきだと思っている。観光協会のあり方としては、区が立案した観光振興プランに基づき、施策を具現化していくのが観光協会の役割であると思っている。

○区内では様々な人が活動しているが、個別の取組になってしまっていて、十分な横連携ができていないと感じている。そうした「点」を繋げて「面」として更に魅力的なものとし、墨田区全体をプロモーションしていくプラットフォームになっていくために、何をすべきなのか考えていかねばならないと思っている。

○観光案内についての拠点は、固定化する必要はなく、人が集まる場所へ機動的に展開する形もあると思っている。一方で、物販は認知度を高めていくためにも拠点が必要だと考える。

(阿部委員)

○固定的な観光案内所よりもイベントごとに出向いて案内する方が良いかもしれない。また、案内所と物販は必ずしも同じ場所である必要はないが、物販事業を継続するのなら拠点は必要だと思う。

○観光協会は、「本物が生きるまち」というコピーで、地域の資源を掘り起こし、磨き上げ、つなぎ合わせるということをキーワードにしてスタートした。当時の課題として、すみだには、素晴らしい価値を持っているのに、自分たちの価値を正当に理解していない人なり、あえてPRしない人が多いということを感じていたが、奥ゆかしい気質の方々が多く、今でも十分には理解が広がっていないと思う。

(高野委員)

行政が改めて考えなければならないのは、観光とは何だろうかということだと思う。そして、観光課という組織は、いかに地域に近づいて行くことができるかということが重要である。

○さくらまつり、納涼の夕べなど、区に根づいているイベントは、区民が主体となるもので、それを観光協会が支えるという形である。これが墨田区の観光であり、それはこれからも変わらない。すみだにしかない日常の観光資源化で観光客を引き込むのは非常に面白いし、まさに原点だなと思う。観光協会が地域を繋いで、発信していくのが次の展開なのかなと思う。

(森山委員)

○観光という切り口で見えていくと、あらゆるものが観光素材となりうる。観光協会がこれまで取り組んできて、掘り起こした観光コンテンツの中で取りこぼれていたのは、地場産業だと思う。探し切れていないコンテンツを掘り起こすためにも、地元の人をつなぎ、情報を集めていかなければならない。

(鹿島田座長)

○これからの観光施策を検討していくのにあたって、観光協会には、墨田区の観光をどうしていくかを一緒に考えてほしい。

○産業と観光の融合が、これまでは消費者向けの商品開発と販売という形で留まっていた。地域の事業者の活動を観光の切り口からPRしていくことも、産業と観光の融合の姿であると考え。そうした視点から、地域で行われている「コト」をクローズアップしていくあり方に変えていきたいと思うが、これは、地域の日常にフォーカスするという意味では原点回帰だと考えている。

○観光協会のあり方は、地域で起こっている作りものではない当たり前の日常、すなわち本物を見つけ出す作業を、行政と一緒にやっていく、という方向性で考えていきたい。

会議の進行が鹿島田座長から事務局へ戻る。

4 その他

なし

5 閉会